

次の生き方

岡本 悠

のとり、の人生は、定まった

「1回、女は、忘れて生きていこう」

小説の賞レースに懸けてみよう！

それまでは、井川遥だろうが、長谷川京子だろうが、宮里藍だろうが、エロ本だろうが、エロ動画だろうが、もう、なんでもありだ...

ここまで、開き直れる自分も、なかなかカッコイイ

でも、これは、まだ偽りの自分だ

俺は、まだ、辿り着いていない

諦めるのは、やめよう

背中に、少し、緊張感を持って

やるだけのことは、やってみよう

それを恋愛にではなく、小説、つまり、仕事に懸けてみよう

楽しんで、生きるのを、まずは、少しやめてみよう

勇気も必要

出版社に、持って行く方がいいなら、そっちのほうが、熱意が伝わるな、やってみよう

山本太郎ヨロシクのやり方だ

結局、自分がどんなに頑張ったと言ったところで、評価するのは、他人なんだ

別段、結婚したいから、働くというわけではないところに、シフトチェンジされるが、そう
なると、今度は仕事へ懸ける情熱が甘くならないか？ となる

とにかく、肝心なことは、女を忘れることだ

この生き方をしないと、順序がバラバラだ

俺が仕事で成功できた先に、結婚とか、恋人というものは、初めてついてくる

今の俺には、なんの魅力もない

そう考えると、今までの俺の恋も嘘だったのか？

でも、そこは、嘘じゃないと思う、あれはあれだ

俺は、40歳にして、凄いい発想に辿り着いたぞ

人からは、遅い、今頃、そんなこと知ったのかと思われるかもしれないが...

まあ、俺も、ここまで、精一杯走ってきた

でも、思うのは、どんなに自分が頑張ったと言っても、評価するのは、審査員であり、女と
いうことだ

じゃあ、いかに生きるか？

まず、俺には小説しかない、今こうして小説を書いているなら、これは答えだ

明日は、違う小説を書いているかもしれない

もしかしたら、旅も必要かもしれない

バーはどうだ？

まあ、そこまで、無理をする必要はない、なにせ、バーに行くと、女の匂いがしてしまうからな、そして、いろいろと面倒臭い

旅に行かないのは、端に面倒臭がりな 面もあれば、直球で小説を書きたいという気持ちの表れでもある

しばらくは待とうか？

居ても立っても居られなくなったら、旅に出よう

これで、完成

あとは、出版社に持っていただけだ

神は唸った

「のとり、忘れもんだ」

それは、道しるべ を書いたノートだった

「なんのために、神がいるか、忘れたのか？」

それは、のとりを助けるためだ

しからば、今すぐ、この言葉を信じなさい

「ゆとり、ののないところに、幸せは咲かない」

のとりは、困惑した

せっかく道を、見つけかけたのに、

神は言った

「自分だけの身体だと思ふなよ、このアマ！」

神は、ゆっくりと、のとりに語りかけた

「まずは、小説のことも忘れなさい」

そして、自由になりなさい

のとり、には、まだ、この意味が理解できなかった

神は、続けた

しばらく、のとりは、遊びに出たほうがいいな

この際、風俗とか、キャバクラとか、そういうのもいいが、

女がそんなに面倒ならば、

お前の膀胱を、しごいて遊んでしまえ

それが、一番楽な手口だ

のとり、は、言った、

「そんなことなら、普段からしてますよ」

神は続けた

「尽きるまで、やるんだよ、お腹一杯になるまで」

のとりにとっては、楽だからわけはなかったが、疑問点が1つあったので聞いてみた

「女の裸の動画を使ってもいいですか？」

神は、それは自由だ、と言った

晴れて、のとり、は、自由になった

ただ、のとりの心に暗い影が立ち込める

「俺、小説書きたいんだよな」「マスターベーションの旅のあとでいいから、それを小説にできないものか？」と、考えた

神は、静かに黙って、大きくなったね、と、僕に笑いかけてくれました

そして、こう言った「まず、いいから、1回ヤッテみなさい」

のとり、は、エロ動画の旅を終えて、1回射精した

「とりあえず、1回で、もう十分です、どうでもよくなりました、なんで毎日、毎回、これに気づけないのか、自分に飽きます」

神は「1回で終わらず、次の波が来たら、また、すぐにヤリなさい」と云った

神は、これで、のとりの旅は終わったよ、この状態から考えてごらん、と云った

女はどうでもよくなったし、小説もどうでもよくなった、次の射精はまた楽しみだが、もう、考えが浮かばない、少し疲れて眠くなってきた

そして、そうでもないかもしれないが、世間はなんで、こんなにエッチなことを隠すのだろう、もっとオープンになればいいのに...と思った

結婚も、恋人も、死んだ...

幸せは何？

そして、のとりは、明日からは、朝起きてから、エッチなことを優先して考えることは、できないかと、考えた

そこが、次の課題だ

まして、俺は、何にも縛られていないのだから、朝から射精するのも悪くない

そうすれば、女のことも考えなくなるかもしれない、明日、試してみよう

まあ、課題は、少し疲れることだ、そして、ネバネバの処理に1時間くらい時間を取られること

そして、今から目を向けた

エッチなことを考え続ける小説も悪くないな、官能小説ではなくて、官能日記みたいなものを書いてもいい

ただ、それは、いささか面倒で、どうでもいい、とも思った

朝からできない日はしょうがない、そして、自分がじいさんになったらしょうがない、と思った

神は、今から先のこと考えるバカいるかよ、と吠えた

のとり、は、朝から疲れたくないんだよな、でも、女のことも考えたくないんだよな、と思

った

どっちを取る

明日、ヤッテ考えればいい、

のとり、は、とりあえず、ペンを置いた

逆の、のとり、が、危惧したのは、女に対する、反射神経が鈍ることだった

女の名前を見ても、反応しない自分に気づいた

そして、40年も築いてきた、この生き方、生活を、真向から変えることは可能かと、まるで、朝、ヨガでも取り入れるような重さを感じた、ヨガならまだしも、疲れる1人H

でも、のとり、の心は反逆する、女を忘れないときついぞ

そのうち、バーの若葉の言葉を思い出した

「真面目だね」

のとり、は、どこかに書いてあった、「結局、最後に残るのは、ちゃんとした男」というフレーズを思い出したが、もう、そんなに自分もたいした男ではないことにも気づいていた。神に操られた、のとりは、自信满满だったが、実は、「釈迦の手のひら」だったのだ

その「釈迦の手のひら」とは、のとり、が、頭で築き上げた世間でしかなかった

そもそも、なぜ、神の書いた論文を出さないのか？　それが気になった

神を世間にさらすことを、恐れているのか？　いや、神が言うくらい、自分の能力がそこまでないことを感じているのだろう

それなら、嘘っぱちでもいいから、全部出してみようか？

神は答えた、「自分に嘘をつくならやめなさい」

のとり、は、もう...

今日には、限界を感じながらも、小説を書く以外したいこともなかった

漠然と思うのは、この作品は大丈夫なのか？ という淡い心配だけ...

のとり、は開き直った、あと、寝るまで45分、どうせ書いただけだと、

何もなかった

ただ、かすかに、明日のメガネ屋がかすみ、明後日の診察の予定がくらんだ、だけだ

そして、明日の朝、俺は、自慰行為をするのか？

そんな、漠然とした期待だけだった

「そんなことまで考えるの？」まるで、若葉のような声が聴こえた気がした

俺は、バカだ

そして、真面目すぎる

だから、モテナイのだ

と、思ったが、それは、まだ、小説で成功してないからだけだ、というシャーレで、吹き飛んだ

思考のよりどころが1つもないのも、考え物だどつくづく思った

つまり、女病なのだ

それを除去するために、自慰行為でガードしようとしている

のとり、は、それはそれで、楽しい考え方だと、あざ笑った

タイムリミットは、近づいている

明日から、生き方を変えよう、しょうがない日は、しょうがない、でも、すぐにでもマークする、それくらい厳しくやらないと...

次第に自慰行為がつまらなくなるかも、と、考えたが、それはそれでいいと思った

明日、実験してみて、しばらく様子を見て、駄目ならば、この小説は捨てようとも思った

一方で、もったいない、とも思った

どうして、そんなに、女を忘れて、生きなきゃいけない、とも

閻魔は唸った、「君は、女病なんだよ！」

だから、しょうがない、納得した

新しい旅の始まりだ

俺とすれ違う女は、何も性欲がない男とすれ違うのだ、それは、女にとって、いいことなのか？ 悪いことなのか？

さして、どうでもいいことだ

神は十戒した

「もう、新しい旅に出たほうがいい」

こんな小説、焼き焦がしてしまえ！

神は、微笑みながら、膀胱を指さした「行け！」と

「完」